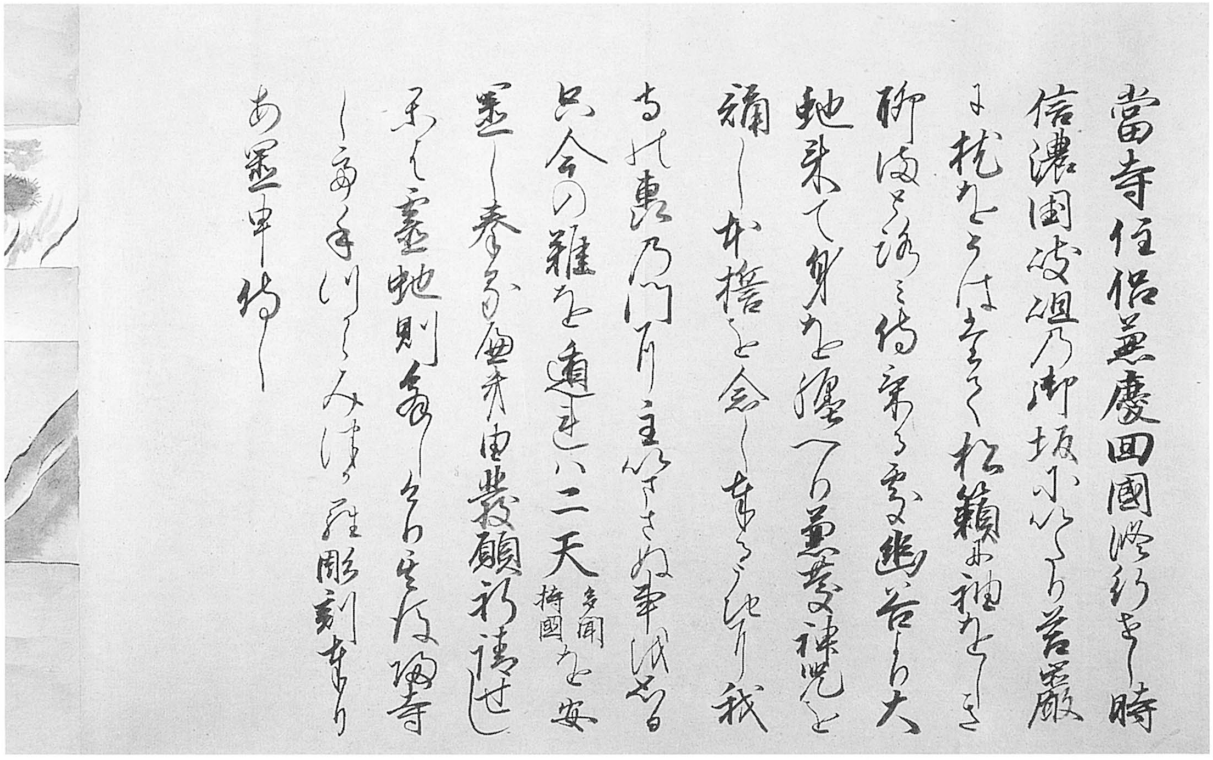
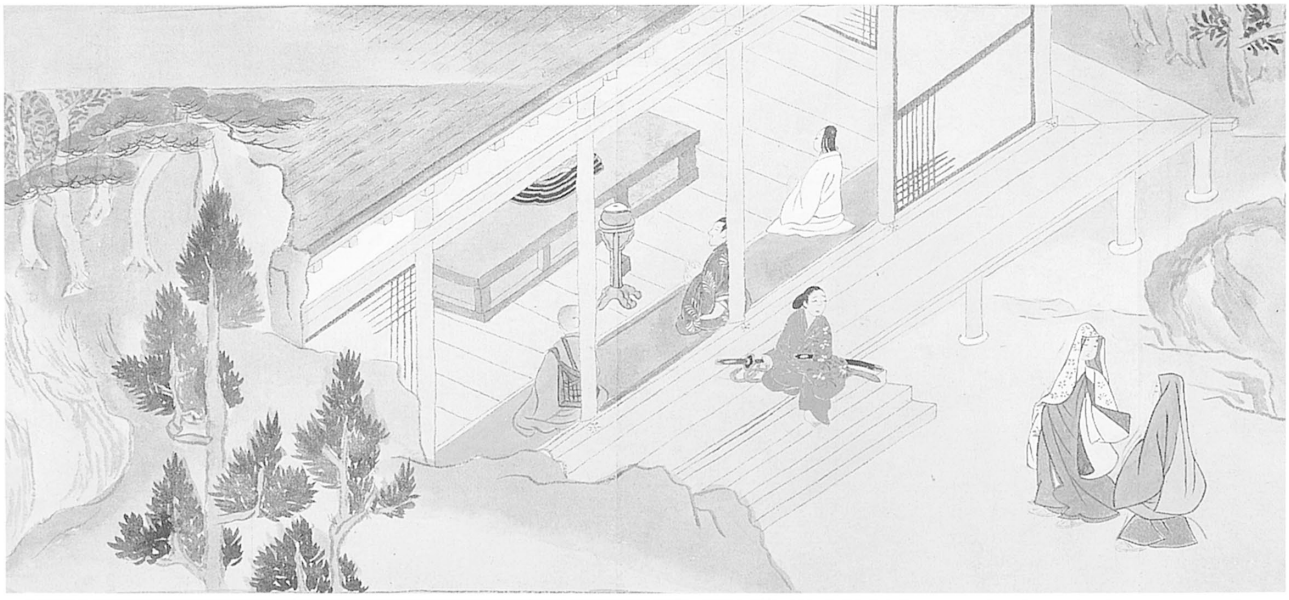
松代藩文化施設管理事務所だより

六連銭

第2号





清水寺縁起絵巻（真田宝物館蔵）

松代藩文化施設管理事務所
この一年をふりかえる

松代藩文化施設管理事務所は、真田宝物館・真田邸（松代城跡附新御殿跡の一部・国史跡）・旧文武学校（国史跡）・旧横田家住宅（国重文）・象山記念館・松代通信資料館の六施設からなります。この一年、多くの見学者をお招きいたしましたが、主に長野市民を中心とした地域の人々を対象に、講座事業やレクリエーションも行ないました。展示を主体とした教育普及活動から、地域の文化を掘りおこすといった意味をもつ講座の開設へ、すなわち受動から能動への試みがどのように皆様に受け入れられたかは不安ですが、今後も少しずつ、能動的な活動も組み込んだ事業を展開していこうと思っております。

まずは、こうした意味から平成八年度の活動を振り返ってみましょう。

『展示・ギャラリートーク』

本所の中心的な活動として、真田宝物館・象山記念館・通信資料館における展示活動があります（なお、通信資料館は平成八年十二月末日をもって閉館いたしました）。真田宝物館では、年間に六回程度の展示替えを行なっております。象山記念館でも、真田宝物館ほどではありませんが、年間に三～四回の展示替えを行なっています。よく「いつも同じ展示だ」とか、「前に一度来たからいいや」とか言われるかたがおります。確かに、近年多くつくられる博物館では、いつ行っても同じ展示ということもあります。しかし、当所の施設の場合、年間に数回展示物を入れ替えておりますので、決して同じ展示ではありません。いつもなにか新しい資料が並んでいるのです。こうした利点を生かして、ぜひ、地元の方々にご利用いただきたいと思っています。展示のよいところは、資料の扱い方がわからない方でも気軽にご覧いただけるということです。殊に、掛け軸や巻子、典籍などは、よほど熟練しないと扱うことは困難です。

このように、頻繁に展示が変わる施設ですから、その折々に展示の説明を行ないました。平成八年六月から毎月第一日曜日に真田宝物館の展示説明を行ないました。また、象山記念館でも、二月に行ないました。

『松代町並みウオッチ』

長野市松代町を中心とした埴科地域には、古代から現代にいたるまでの多くのみどころがあります。こうした史跡もあまり知られておらず、平成八年度は四回、各回それぞれにテーマをもたせて見学会を行ないました。毎回定員をこえる申し込みがあり、関心の高さを改めて知りました。

第一回目は松代の城下を、現在残る建物や当時の景観が残る場所をめぐりながら、その様子を学びました。

第二回目は真田家などの墓所や廟所をめぐり、近世建築のすばらしさや、墓所や廟所のもつ意味について知りました。

第三回目は更級・埴科地域に所在する古代の仏像をめぐり、この地域が古くから文化豊かな土地であったことを知りました。

第四回目は中世の山城・居館跡をめぐり、中世武士たちがどのような場所に居を構え、またどのように敵の攻撃に対抗したかを知りました。

このあわせて四回の見学会は、ある意味では松代とは関係ないようにも思われますが、近世の松代を知るうえにおいて、古代の仏教文化からみたり、あるいはもっと広域的な視野に立たないと、松代という土地がもつ本当の意味での歴史的な環境というものはわかりません。こうした意味で、今回の四回シリーズの見学会を松代町並みウオッチとしました。

今後も、さまざまな視野から松代を見なおす企画を行なっていきたいと思っております。

旧横田家住宅でのもちつき大会（注連縄づくり）

『松代おもしろゼミナール』

江戸時代、松代は真田家十万石の城下町として栄えました。こうした繁栄のなか、松代城下には多くの文化が生まれました。そのひとつが真田家伝来の大名道具の数々です。しかし、この大名道具についての見方はたいへん難しいものです。このような理由から、真田家伝来品の一部のものについて、わかりやすく紹介しました。

第一回目は、当所学芸員によって、真田家文書の見方をお話ししました。

第二回目は、長野県立歴史館の橋詰文彦氏に、近世の旅日記についてお話しいただきました。

第三回目は、同じく長野県立歴史館の伊藤羊子氏に真田宝物館蔵の「大織冠図屏風」についてお話しいただきました。

『特別展示「真田幸貫とその時代」』

平成八年九月二十五日から十一月十一日まで、真田宝物館で特別展示を行ないました。真田宝物館の所蔵する資料の多くは、八代藩主・幸貫との関係をぬきには考えられません。また、幕末期の松代藩の在り方を考えるうえでも、幸貫の業績を見逃すことはできません。こうした点が今展示の主題です。詳しくは『六連銭』創刊号をどうぞ。

『旧横田家住宅餅つき大会』

十二月十四日に旧横田家住宅において親子餅つき大会がありました。午後は注連縄づくりを行ないました。

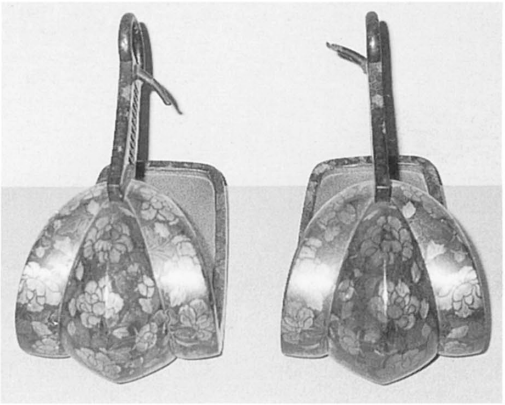
餅つきや注連縄づくりという伝統行事は、近年あまりみられなくなりました。こうしたことから、子供たちを交えての行事として行なってきています。

『収蔵資料の整理・管理』

真田宝物館が所蔵する資料の整理・修復・調査は前年に引き続き行なわれました。主なものとして、真田家伝来の武具の修理、矢沢家文書の整理、真田家文書についての基礎的整理、真田家伝来のアイヌ・北方関係資料の調査などがあります。

武具の修理では、真田家伝来品のうちの鐙（あぶみ）を二点修復しました。こうした修復は、以前から継続して行なってきていますが、数百年もの間伝えられてきたものを後世に残す作業として重要です。

矢沢家文書は、松代藩の家老職を勤めた矢沢家に伝来した文書のことです。そして、矢沢家からは、近年、古文書を含む、多くの貴重な資料が寄贈されました。これをうけて、今年度からこの古文書についての整理をはじめています。大名家に匹敵する内容のもので、興味深い資料群です。



修復なった鐙

真田家文書の基礎的整理は、秋のテーマ展示「真田家文書の世界」で成果を報告しました。この中で、真田家文書の成立や構成についての新しい見方をお示しいたしました。

アイヌ・北方関係資料の調査は、佐々木利和氏に調査をご依頼したものです。真田幸貫が集めた資料の中には、きわめて貴重なアイヌ関係の資料が多いことがわかりました。

このように、当所では展示業務のほかに、さまざまな事業を行なっています。非常に地味な作業ばかりですが、真田家などが伝えてきた資料を後世に伝えたり、正統な評価を与える仕事は、当所に課せられたもっとも重要な仕事です。なお、こうした事業の成果は、機関誌『松代』などによって公にしていく予定です。

平成九年度の予定

平成九年度も、松代がなお一層おもしろくなるように、また文化の発進基地となるように、多くの事業を展開する予定です。そのいくつかを紹介しましょう。

平成九年度の目玉は……

▼旧文武学校に槍術所が新しくお目見え

現在、旧文武学校では、槍術所の移築・復元工事がすすんでいます。槍術所は近年まで長国寺の庫裏として使われていました。

槍術所がオープンしますと、旧文武学校は、江戸時代そのままの姿をわたしたちに見せてくれることとなります。

▼象山記念館がおもしろくなる

松代通信資料館の閉館にともない、そこでの展示品を象山記念館に移します。これにより象山記念館は、象山の遺徳をしのぶのみならず、象山にはじまる日本通信の歴史をわかりやすく展示する場へと展示の目的が拡大します。

▼真田家伝来品をはじめとする所蔵資料がコンピュータで調べることができる

真田宝物館で収蔵する資料は数万点に及びます。こうしたもののなかには、技術的に展示できないものが多くあります。こうしたことから、コンピュータをもちいて、収蔵品の情報を提供するシステムを導入します。

松代藩文化施設管理事務所日誌抄

四月一日　加来鎮雄係長・降幡浩樹・河野聡子学芸員転任
村田巖所長・三俣清茂係長・原田和彦・藤森さゆり学芸員着任
五月十九日　真田宝物館の特別展「松代城」が終了
五月二十一日　真田宝物館平常展示「真田家の歴史」・テーマ展示「三村三代」始まる
六月九日　真田宝物館ギャラリートーク
六月二十日　松代町並みウオッチⅠ
七月七日　真田宝物館ギャラリートーク
七月二十五日　真田宝物館テーマ展示「松平定信」始まる
七月三十一日　博物館実習、阿部政孝（大正大）・祖山裕史（立正大）・桑島美幸（文化女子大）の三人を受け入れる。
八月四日　真田宝物館ギャラリートーク
八月五日　博物館実習終了
八月八日　松代町並みウオッチⅡ
九月一日　真田宝物館ギャラリートーク
九月二十五日　真田宝物館特別展示「真田幸貫とその時代」始まる
十月五日　真田邸「古今東西　花」始まる
十月六日　真田宝物館ギャラリートーク
十月十七日　松代町並みウオッチⅢ
十月二十二日　象山記念館展示替え・平常展示「佐久間象山とその時代」始まる
十一月十日　真田宝物館ギャラリートーク
十一月十一日　真田宝物館特別展示終了
十一月十三日　真田宝物館テーマ展示「真田家文書の世界」始まる
十二月十四日　旧横田家親子餅つき大会
十二月五日　松代町並みウオッチⅣ
十二月二十八日　松代通信資料館が休館
一月五日　真田宝物館ギャラリートーク
一月十五日　真田宝物館展示替え
一月二十八日　象山記念館展示替え
二月二十三日　象山記念館ギャラリートーク
三月一日　松代おもしろゼミナール（ほか、十五・二十二日）
三月二十日　真田宝物館・旧横田家「ひなまつり」始まる
三月二十六日　象山記念館「近山コレクション」展始まる。
三月三十一日　松代通信資料館を閉館

資料紹介　清水寺縁起絵巻

真田宝物館には、賀茂祭礼絵巻などの模本がいくつか伝わっています。この清水寺縁起絵巻も模本のひとつで、「清水の舞台」で有名な京都東山・清水寺の創建と、本尊千手観音の霊験説話を主題にしたものです。

真田宝物館所蔵の清水寺縁起絵巻（宝物館本）は、現在東京国立博物館所蔵で重要文化財に指定されている、清水寺縁起絵巻（東博本）の系統にはいると思われます。東博本はもと清水寺にあり、その絵は十五世紀後半から十六世紀初頭にかけて活躍した土佐光信、詞書は近衛尚通、甘露寺元長など有数の能書家によるとされています。

宝物館本は東博本よりも淡彩で、多少異なってはいますが、構成にほとんど違いはなく、詞書の字体も東博本とよく似ています。

では、なぜこの作品が真田家に伝来したのでしょうか。

八代藩主真田幸貫の実父は、寛政の改革で有名な松平定信でした。定信は古物愛好家としても知られ、古書画・古武器具などを調査・書写した『集古十種』（しゅうこじゅっしゅ）『古画類聚』（こがるいじゅう）を編纂しています。これらの編纂にあたってなされた古器・古画の模写と、宝物館本との関係が指摘されています。宝物館本は、格子戸の細かい部分や、着物の模様、樹木の色など、途中まで描いて後を省略している箇所がみられます。これは、正確な書写というよりもむしろ、編纂の前提となる調査を目的とした模写であった可能性を示唆しているともいえるでしょう。

こうした模写作品の一部が、桑名松平家から幸貫を通じて真田家にもたらされたとも考えられます。

（山中さゆり）

松代藩文化施設管理事務所だより
六連銭　第二号
1996年3月31日
編集・発行　松代藩文化施設管理事務所
〒381－12
長野市松代町松代4－1
☎（〇二六）二七八－二八〇一
題字：長野市教育長　滝沢忠男